

透析治療の質を高めるために選んだ電子カルテ

透析システム・画像ファイリングシステムともスムーズな連携を実現



左から2番目が電子カルテのモニタ。いちばん左の画像診断用高精細モニタとも連動。画像をマウス操作で電子カルテに貼りつけることもできる。写真は鈴木一裕院長

新規開業したばかりの「援腎会すずきクリニック」では、人工透析管理システムと画像ファイリングシステムが連動した電子カルテシステム「E-CARTER（三菱化学メディエンス）」を導入。受付から検査、診療、透析管理までITによる一元管理を実現している。同クリニック院長の鈴木一裕氏に、新規開業の経緯や電子カルテ導入の目的とその有用性などについてインタビューした。

●援腎会すずきクリニック 鈴木一裕氏に聞く

2008年5月にオープンした援腎会すずきクリニックには、2つの重要なキーワードがある。まず1つは「腎不全と上手につきあいながら」元気で長生きできるような治療を提供すること。もう1つは「人工透析中も辛さを感じないで、気持ちよく過ごせる」ことだ。

院長の鈴木一裕氏は1994年に母校の福島県立医科大学泌尿器科に入局。医局員として勤務した後に、04年には、同じ福島県内の太田記念病院に移り、泌尿器科部長などを歴任。同じ時期に太田西ノ内病院でも診療にあたっている。

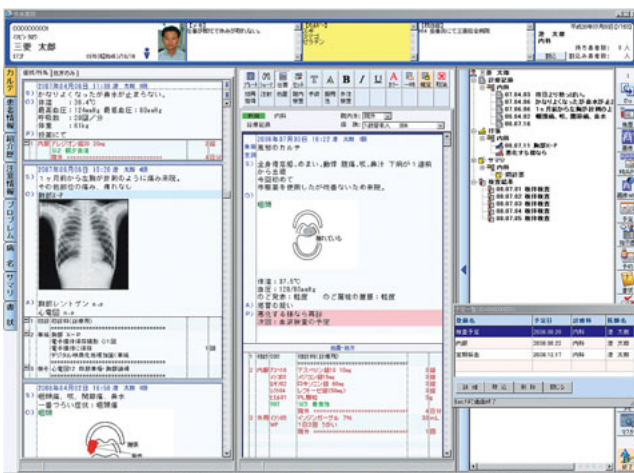
「常に手術が上手で、患者さんに貢献できる医師でありたいと思ってきました。しかし、以前から自分の診療の中心は腎不全治療であり、周囲からも一定の評価を受けてきました。また、血液透析以外にも腹膜透析や腎移植にも熱心に取り組んでいました」

そう話す鈴木氏が、独立を考えるようになったのは40歳の頃だったという。

「私が『ビジョナリーカンパニー2 飛躍の法則（ジェームズ・C・コリンズ著 山岡洋一訳 日経BP社）』を読んだ際、『仕事で成功できる者は、自分が情熱を持って取り組めて、自分が1番になれば、そして経済的な原動力となるものを選び、その分野に集中して取り組むべきだ』という文章に出会いました。そこで自分には何ができるのだろうかと考えたとき、これまで最も時間をかけて診療に取り組んできた腎不全治療に絞ったクリニックを作ってみたいと思ひ立ち、人工透析中心のクリニックを開院することを決めたのです」

最新の機器・システムを導入、 オーダーメイドな 診療を目指す

援腎会すずきクリニックでは、鈴木氏の経験を活かし、本格的な検査環境を整えた。泌尿器科・内科の診察は1階、人工透析は2階に完全に分離し、院内の動



電子カルテ「m-KARTE(三菱化学メディエンス)」の画面。カスタマイズが容易な各種テンプレートなどの入力補助ツールが優れた利便性を発揮



08年5月にオープンしたばかりの援腎会すずきクリニック。モダンな雰囲気のある建物で、採光にも気を配っている。駐車スペースも十分に確保

線は、患者、医師・スタッフ、付き添いの家族、そして介護士たちそれぞれが動きやすいように気を配った。

患者のプライバシーを最大限に確保しながら、明るく開放的で、清潔感のある院内は、患者からの評判も良い。また、透析室は天井を高くして、透析中の圧迫感の緩和にとめていている。ベッドには1床ずつ無料のテレビがあり、患者に、直接、冷・暖房の風が当たらないようにするなど、細かな点にも配慮が行き届いている。

透析装置は最新の透析液洗浄消毒方法を採用した東レ・メディカル社のトータルクリン化システムを導入し、また膀胱鏡検査では患者への痛みが少ない軟性膀胱鏡を採用する。

「自分が目指しているのは、個々の患者さんに対するオーダーメイドな診療であり、画一化しない指導です。腎不全という病気や、人工透析につきまといがちな苦しくて辛いイメージを、何とか払拭したいですね」

長く腎不全の患者と向き合ってきた鈴木氏だから、安心・安全で、なおかつ快適な治療環境が実現できたのだらう。

最新の透析システムと連動した電子カルテシステム「m-KARTE」

鈴木氏は、援腎会すずきクリニックを開院する際に「ぜひ電子カルテを使いたい」と考えていた。

「大病院時代に電子カルテを使用していたときにも、使いやすいようにカスタマイズしたりしていましたので、電子カルテに対するアレルギーはありませんでした。逆に作りこみの自由度が高い診

療所の電子カルテをぜひ使ってみてくださいね。

それから人工透析の医事会計は非常に特殊で大変と言われており、できるだけ医事会計を簡便にするためにも、電子カルテは必要だと考えました」

ただし鈴木氏には電子カルテの選定に1つの絶対条件があった。

「クリニックで使用する人工透析管理システムと連動するシステムであることが電子カルテの絶対条件でした。東京の電子カルテ展示場であるメディアプラザなどにも足を運んだりしましたが、クリニックで使用する人工透析管理システム



透析室には31台の透析装置を設置。すべての透析装置でオンラインHDF(血液ろ過透析)が可能

「Miracle DIMCS21(東レ・メディカル)」と完全に連動できる電子カルテは三菱化学メディエンスの「m-KARTE」だけで、そういう意味では選択肢はほとんどありませんでしたね」

また、「m-KARTE」には検査のオーダーやデータ受信をオンラインで結び、「ES」機能があり、検査項目の多い泌尿器科にとって利便性の高いシステムであると鈴木氏は話す。

テンプレートの作り込みで診療スタイルに合わせた入力が可能

鈴木氏が「m-KARTE」に慣れていないということもあり、開院前後の時期には「使いにくいな」と思ったこともあったという。

「電子カルテにはテンプレートという決められた書式があります。これに書き込んだり、選択したりして、診療の情報を入力していくのですが、当初は、ソフトに事前に登録されているテンプレートをそのまま使ったために、苦労しましたね。医師には各々、自身の診療スタイルがあり、他人の作った書式に合わせて診療を行うのは負担になるものなのです」ところが三菱化学メディエンスの担当者やオンラインサポートなどで相談しているうちに「m-KARTE」の特長が分かってくるると、鈴木氏の評価は180度変わっていった。

「実は「m-KARTE」の場合、テンプレートの作り込みが簡単にできるので、元々セットされていたテンプレートに、自分に必要な項目などを追加して、使いやすいものにしていくことができました。聞くところによると、こうした柔軟性がない電子カルテもあるようです。今では、「m-KARTE」を導入して良かったと思っています」

今、鈴木氏はカルテだけでなく、紹介状や栄養指導箋、診療計画書、同意書などのテンプレートも、独自に次々と作りこんでいる。

「新規開業したばかりで、まだ患者さんの数が多くないからできるのかもしれませんが、患者さんの個別の事情に合わ

援腎会すずきクリニック

援腎会すずきクリニックは、鈴木一裕院長が、「元気で長生きができる」ことと「つらくない透析ができること」を目的に、2008年5月にオープン。「援腎会」の名には、患者が医師、スタッフ、家族、社会などとスクラム（円陣）を組んで治療にあたり、健やかな生活がおくれるようにとの願いがこめられている。そのため最新の医療設備はもちろん、院内はプライバシーを最大限に確保しながら、明るく開放的で、患者に閉塞感や圧迫感を与えないような設計が心がけられている

所在地／福島県郡山市富久山町久保田字伊賀河原12

TEL／024-925-0860

URL／<http://blog.m3.com/ennjinnkai/>

標榜科目／人工透析 泌尿器科 内科

医師／1名

臨床検査技師／1名 臨床工学士／2名

看護師／5名

休診／人工透析：日曜、火曜と土曜の午後

泌尿器科・内科：日曜・祝祭日、木曜

と土曜の午後



ベッド脇にモニタを設置。検査中の患者が、リアルタイムでエコー画像を確認できる



痛みの少ない軟性膀胱鏡を採用、患者の負担を極力少なくしている



衛生面に配慮して扉をなくした男性用トイレ。通路からは見えない。泌尿器科ならではの工夫が随所に見られる



レセコンとの連動も鈴木院長が「(電子カルテを)導入してよかった」と話すポイント。精算時の患者の待ち時間が想定していたよりも大幅に短縮

せてテンプレートのパターンを増やしたことで、『m-KARTE』はずいぶん使いやすくなりましたね。作り込むための操作がたいへんだったから、これほど一所懸命になれなかったかもしれない。ですから自分に合わせて簡単に作り込めることは、電子カルテの機種選定の上で、とても大切ですね。今では、毎日診察室で診療の合間に異なったパターンのテンプレートを作っていくことが、とても楽しくなっています。

個人的には電子カルテはテレビゲームみたいなものだと思います。使い込んでいくと、どんどん面白くなり、それに連れてテンプレート計算される。この連動は、透析従事者の労力を軽減し、転記ミスなどによる入力ミス防止につながる。また、今回導入したコニカミノルタヘルスケア社製CRとの連携システム「Luno-CX」によって、画像ファインリングシステムと「m-KARTE」がスムーズに連動し、超音波画像、内視鏡画像等を簡単なマウス操作（ドラッグ&ドロップ）で電子カルテに取り込むことができる。電子カルテの有用性について、鈴木氏はつぎのように話す。

画像システムとも連動。問診の精度も高くなり、診療の質、効率共に向上

人工透析管理システムに入力した患者情報や、ろ過透析や処置、薬剤などの診療情報は「m-KARTE」に転送され、自動的にレセプト計算される。この連動は、透析従事者の労力を軽減し、転記ミスなどによる入力ミス防止につながる。また、今回導入したコニカミノルタヘルスケア社製CRとの連携システム「Luno-CX」によって、画像ファインリングシステムと「m-KARTE」がスムーズに連動し、超音波画像、内視鏡画像等を簡単なマウス操作（ドラッグ&ドロップ）で電子カルテに取り込むことができる。電子カルテの有用性について、鈴木氏はつぎのように話す。

「カルテ上に移した画像に文字を書き込むだけなので、シエマを描くよりも正確です。後で見ると、情報共有する必要がある場合でも分かりやすくなりました。テンプレートが整っ

てきたこともあるのですが、白紙の紙カルテで診療を始める時と比較して、問診時の聞き忘れが少なくなっていることに気づきました。紙カルテの時には、診療後に「あれも聞いておけば良かったかな」と思ったり、診察室に戻ってもなかったり、再来院の時に聞かなければならなかったりしましたが、今はあらかじめ画面上の書式の中に問診事項に盛り込まれているので、こうした聞き漏らしはなくなっています。また、カルテ作成の際、主な症状はキーボード入力して、他の事項はテンプレートで入力するようにしたら、入力作業がとて楽になり、効率が良くなりましたね」

鈴木氏が、「m-KARTE」導入後の数カ月で実感できた電子カルテの有用性は、まだある。

「患者さん向けの診療計画書も、電子カルテなら簡単にできます。名前やIDは自動的に入力され、予定する検査項目も選択するだけなので、計画書が簡単にできるわけです。計画書の中に生活指導も書き入れられます。」

そして、診療終了後に会計業務が瞬時にでき、待ち時間が短縮されたことは、患者さんにも、クリニックにも大きなメリットですね。現在はオープンして間がないです。現在はまだ至らないところはあると思います。具体的には、電子カルテのテンプレートの充実も含め、多くの患者さんを迎えられる院内の体制を整えているのが現状ですが、『m-KARTE』は、導入して正解だったと思います」

援腎会すずきクリニックでは、今や『m-KARTE』は、質が高く、効率的な診療を実践するために欠かせないものになっています。